2024（令和6）年度エリザベト音楽大学大学院の

博士学位論文、内容の要旨および審査結果の要旨について

学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号）第8条およびエリザベト音楽大学学位規程第12条により、次の者の博士論文内容の要旨及び審査結果の要旨を公表する。

氏名	末政 優衣		
学位の種類	博士（音楽）		
学位記番号	甲第21号		
学位授与年月日	令和6年9月18日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
学位論文題目	「木下牧子のピアノ作品研究—木下牧子のピアノ作品(室内楽曲と独奏曲)の考察を中心に—」		
学位論文等審査委員			
(総合審査) 委員長	教授	壬生	千恵子
	教授	垣内	敦
	准教授	川上	統
	准教授	佐々木	悠
	准教授	志鷹	美紗
(演奏審査) 委員長	教授	垣内	敦
	教授	馬場	有里子
	教授	壬生	千恵子
	准教授	志鷹	美紗
	講師	戸梶	美穂
(論文審査) 委員長	教授	壬生	千恵子
	教授	垣内	敦
	准教授	川上	統
	准教授	佐々木	悠
	本学名誉教授	柴田	美穂

論文内容の要旨

木下牧子（Makiko Kinoshita, 1956-）は、現代の日本を代表する作曲家の一人である。木下の名は、数多くの合唱曲で広く世に知られ、幅広い層の人々に愛され続けている。他方、木下の作品全体を見渡せば、その創作の範囲は管弦楽曲、吹奏楽曲、室内楽曲、歌曲、オペラなど多岐にわたる。本論文では、作曲家木下牧子について、その作品変遷を整理するとともに、作

品にみられる魅力や独創性、そして日本の現代音楽界での活躍を多角的にまとめた。また、木下のピアノを含む4つの室内楽作品とピアノのための《6つのフラグメント》を取り上げ、奏法上の特徴をシャンドール (György Sándor, 1912-2005) のあげる5つの動作パターンを参考にして分類し、考察した。

第1章では、木下の作品の変遷を、作品数の推移を踏まえて3つの時代に分けて検討した。第1期(1976年～1982年)は、主に管弦楽作品が多く作曲され、日本音楽コンクール等での受賞により木下が自ら創作の方向性を模索し始めた時期である。第2期(1983年～1999年)では、器楽作品に加え、声楽作品の創作が増加した。この頃の器楽作品の特徴には、第1期に引き続き大規模編成の管弦楽曲と、第3期に本格化するピアノ作品があげられる。一方、この時期の声楽作品の特徴として、委嘱による合唱作品の急激な増加と、歌曲への取り組みがある。第3期(2000年～現在)においては、木下は再び器楽曲への関心を高め、声楽曲と並行して様々な作品を発表している。この時期の器楽作品群の特徴は、これまで発表してきた編成・曲種の継続的な創作のほか、新たな編成・曲種の展開、そしてピアノ独奏曲および室内楽曲があげられる。声楽曲は第2期と同様に多作であることに加えて、木下にとって初めてのオペラもこの時期に作曲されている。

第2章では、木下の作品の受容のあり方を、作品を取り巻く様々な状況や評論等から考察した。木下の器楽曲について特筆すべきは、作品が継続的に演奏され続けていることであり、そのことは、時どきの評価によるだけでなく、音楽そのものに魅力があることを物語っている。一方、声楽曲に関しても、合唱曲にとどまらず木下の作品は広く知られ、畑中良輔の「新しい日本歌曲の創造主」という言葉に相応しい作品を次々と生み出している。また、木下が開催してきた作品個展も大きな意味を持ち、木下個人の作品発表という一義的な意味を超えて、聴衆にとって新たな音楽との出会いの場を提供してきたことがうかがわれた。作品に見られる独自の魅力や独創性については、その全てを譜面による分析に帰結させることは非常に困難であるが、本章では、木下作品の試論的な音楽分析-「現代的でありながら聴きやすい」を生み出す要素の抽出として、オーソドックスな書法と難解ではない現代的書法の2点をあげた。

第3章では、日本の女性作曲家としての木下の位置付けと活動のあり方に焦点を当て、邦人女性作曲家に関する先行研究、日本音楽コンクールにおける女性受賞者の状況、そして木下の活動の特徴について考察した。まず、日本における女性作曲家を取り巻く状況については、20世紀後半から21世紀にかけて少しずつ変化が見られるものの、依然としてジェンダーによる偏見が残っていることが先行研究から明らかとなった。次に、日本音楽コンクールにおける女性作曲家の受賞状況を分析した結果、1970年代以降に、女性作曲家の入賞が徐々に増加していることが確認された。木下は1982年に作曲部門で入賞を果たしており、80年代以降に大きく増加していく女性作曲家の波の中で先駆けとなった存在であり、日本の現代音楽界における女性作曲家としての新たな道を切り開いたといえる。また、木下のキャリアで注目すべき点の一つに、一度も教授職に就いていないことをあげ、これが、木下の創作活動をアカデミックな現代音楽の世界にとどめず、より広範な音楽活動の追求へと導く結果となった可能性を示唆した。

第4章では、筆者の専門とするピアノ演奏の立場から、木下のピアノを含む室内楽およびピアノ独奏曲における動作を、シャンドールによるピアノの基本的な動作パターンに基づいて分類し、まとめた。まず、自由落下のみの動作においては、スタッカートへの動作への変化が特徴であり、反復によって奏者自身のエネルギーが高まり、より演奏者の能動性が強調される面白が見られた。五指運動の全体的な特徴としては、両手交互の動作が多いことがあげられる。また、分散和音においては手に馴染みやすい音型が多く、両手間で対称的な運動性や、動作の連続性から生じる高揚感とクレッシェンドを伴い、自発的に生成されるエネルギーの高まりが特徴であった。回転の動作は、トレモロを含めて同型反復され、響きの持続が作り出される例が多くみられた。スタッカートの動作は、五指運動に次いで多く、シャンドールが響きの変化

の可能性が無限であると述べているように、ピアニスト自身に様々な音色を求める可能性と楽しさを与えているといえる。木下の作品におけるスタッカートの特徴は、五指運動と同様に、両手交互の動作が多く用いられ、単音ないし和音を1音ずつ交互に奏する例が多く、打楽器のように桴で叩く動作が強調されている。圧すタッチは、五指運動やスタッカート、回転による連続した動作から圧すタッチに繋がる例が多くみられ、五指運動やスタッカート、回転の動作の反復やクレッシェンドによって高まったエネルギーが、圧すタッチの動作によって発散される快感をもたらしていることがわかった。

本研究では、現代の日本を代表する作曲家でありながら、まだ体系的な研究が十分に進められていない木下牧子に焦点をあてた。木下の作品の持つ魅力や独創性、そして日本の現代音楽界での活躍については、文献資料だけでなく同時代に生きる作曲家であるがゆえに可能な一次資料や言説を収集し、探索的研究を行うことで、今後の研究の基礎研究とすることを目標とした。さらに、演奏家としての視点から、木下の作品が、一般的な奏法や演奏しやすい動作を用いて、“演奏する喜び”を感じさせるものとなっていることを明らかにした。今後の研究においては、実践的な課題として、本論文で提案した演奏技術の向上に寄与する具体的な手法の影響を、引き続き検証していきたい。また、演奏者との対話や演奏活動を通じて、木下の音楽がどのように解釈され、受け入れられているかも探していきたい。

審査結果の要旨

1. 演奏審査

末政優衣さんは、博士後期課程において、現代日本を代表する作曲家として活躍される木下牧子氏の室内楽曲を含む2000年以前と以降のピアノ作品を取り上げ、そこに見られる反復書法の比較を中心に研究を行った。演奏審査では、その研究内容に関連する作品として、プログラムの前半で木下氏のピアノ・ソロ作品および比較対象として田中カレン氏のピアノ・ソロ作品、後半では木下氏の室内楽作品を取り上げ、演奏を通して研究成果の具現化を試みた。

一作品目のピアノのための《9つのプレリュード》よりプレリュード2、5、7の三曲が演奏された。それぞれに音楽観や形式の違う三曲であるが、安定した技術力で終始落ち着いた演奏であった。ただ、プレリュード5のジャズ的なリズムの躍動感や張りのある音色といった特徴をより多く感じることでできる表現であったならば、三曲を並べた意味合いがより深まったのではと感じた。二作品目のピアノのための《夢の回路》は、楽曲分析に基づいた冷静な演奏であったが、木下氏が何を表現したいのかを明確に伝える表現技術をより追求した演奏であると、木下氏の作品の持つ多彩性を堪能できたかと思う。続いて比較対象として選曲された田中カレン氏のWater DanceよりⅢ、Techno EtudesよりⅢでは、おとなしい仕上りの演奏ではあったものの、繊細な響きによる表現や、ミニマル音楽の反復書法によって高揚させられる感情が魅力的に再現されていた。その後、再び木下牧子氏によるピアノのための《6つのフラグメント》が取り上げられた。こちらは、断片的に現れるモチーフの性格的魅力が、木下氏独特の感情表現を伴う反復書法によってもっと強調できると、演奏がさらに面白くなるのではないかと感じた。

リサイタル後半では2台ピアノのための《PUZZLE》、ピアノ四重奏曲のための《もうひとつの世界》の二つの室内楽作品が取り上げられたが、共演者との息の合った完成度の高い熱演であった。2台ピアノでは木下牧子氏の反復書法が演奏の中でしっかりと生かされ、また、四重奏曲ではクラスターの使用などを加えた作曲技法の広がりを存分に味わうことのできる素晴

らしい演奏であった。

ひとりの作曲家の作品を中心としたプログラムであるがゆえに、個々の作品の性格を生かした演奏表現では若干課題が残る部分もあったが、特に室内楽作品の演奏においては十分な準備とクオリティーが認められる素晴らしい演奏であった。よって、博士号授与に十分値する演奏能力を備えているとして、審査員全員の合意を得た。

2. 論文審査

本研究は、邦人作曲家木下牧子 (Makiko Kinoshita, 1956-) のピアノ作品を中心に、その創作活動について論じたものである。

本論には、木下牧子自身の生涯を概観し、作品の変遷を整理するとともに、その作品にみられる魅力や独創性、さらに日本の現代音楽界での独自の活躍のあり方や位置付けについての考察がまとめられている。また、演奏家の立場から、木下のピアノを含む4つの室内楽作品とピアノのための《6つのフラグメント》を取り上げ、シャンドール (György Sándor, 1912-2005) 動作パターンを参考にした分類と考察がなされている。

木下の音楽の魅力についての二つの視点、すなわち、「現代的でありながら聴きやすい」と「演奏する喜び」を形作る要素に着目し、試論的な音楽分析からその特徴を明らかにする試みは、本研究の独自性を担保するものであると言える。さらに、女性作曲家としての木下牧子の活動を捉えた丹念な資料収集と整理は、結果として、日本の現代音楽史における女性作曲家の環境変化についての、貴重な資料となっており、総括では、木下の創作活動と音楽的特徴に関する、多角的な検討が展開された。

木下は、現代の日本を代表する作曲家の一人であるが、音楽研究領域において、これまで包括的に取り上げた研究はまだ殆どない。その点において、本研究は、作曲家木下牧子に関する重要な基礎研究の一つに数えることができる。現存の作曲家についての研究には、自ずと限界があり、本論もそれを超えられない部分はあるが、同時に、現存の作曲家だからこそ得られる、本人による正しい言説や資料の整理がなされており、その取り組みは、今後の音楽研究にとっての資料的意義も認められる。他方、作品の分析については演奏領域からの試行に留まり、今後の一層の研究が期待されるが、本論での考察・検討事項については、博士後期課程におけるピアノ・リサイタルおよび演奏審査においても、実践面からの十分な検証がおこなわれている。

これらのことから、本論は、博士後期課程における研究成果としての一定の評価を与えることができる、という判断がなされた。

3. 総合審査

以上、演奏審査と論文審査の両方を鑑みた総合審査において、本研究が新規性と独自性を持ち、また、この分野を研究する者に寄与する基礎研究としての十分な成果を認められるとの判断から、全員一致で「博士(音楽) Doctor of Musical Arts」の学位を授与するに値するものと判定された。